P29021

健康高齢者の生活時間に対する認識の地域間の相違点

Difference between communites in recognition for the time budget of the healthy elderly people

○石橋　裕 (OT) [1)]，山田　孝 (OT) [1,2)]，小林法一 (OT) [1,2)]，村田和香 (OT) [3)]，川又寛徳 (OT) [1)]
[1)]首都大学東京健康福祉学部　作業療法学科，[2)]首都大学東京大学院人間健康科学研究科，[3)]北海道大学大学院保健科学研究院

Key words: (生活時間)，人間作業モデル，(閉じこもり)

[はじめに]　生活時間(Time budget)とは，1日24時間を個人がどのように消費したのかの記録である(Franklin,1957)．作業療法では，生活時間は作業質問紙(OQ)で評価することができる．OQは，人間作業モデルを理論基盤とする質問紙であり，各活動に対する認識(活動をどのように感じているのか)を，有能感，価値，興味ごとに明らかにすることができる(Smith,et.al.,1986)．本研究では，異なる3地域(東京荒川区，北海道札幌市，福島只見町)に在住する65歳以上の健康高齢者を対象に，1日の生活時間に対する認識を調査した．本研究の目的は，異なる3地域によって健康高齢者の1日の生活時間に対する認識に相違があるのかを検討することである．

[対象と方法]対象は，2008年6月から2010年12月までに東京都荒川区，北海道札幌市，福島県只見町の3地域で開催された「65歳大学」の参加者43名(男性13名，女性30名，荒川区14名，札幌市10名，只見町19名)である．生活時間の認識の調査にはOQを使用した．OQは，対象者に30分毎に実施している代表的な活動(例;テレビを見る，買い物に行く)を1つ挙げてもらい，その活動が(1)「仕事・ADL・遊び・休息」のどの遂行領域に該当し，(2)どのくらいうまくやったか(有能感)，(3)どのくらい重要か(価値)，(4)どのくらい楽しんだか(興味)を聴取した．(2)～(4)については5段階のリカード尺度で聴取し，最も肯定的な回答を5点，最も否定的な回答を1点とした．得られた結果は，「仕事，ADL，遊び，休息」の4つの遂行領域と，有能感，価値，興味の下位項目で分類し，合計時間を算出した．分析は，有能感，価値，興味の認識と合計時間を荒川区，札幌市，只見町の3群間で比較した．検定には，Kruskal-Wallis 検定と一元配置分散分析(危険率は5%未満)を用いた．本研究は，首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認(08021,09009)を得て実施した．

[結果]　3群間の性や年齢に有意差は認められなかった．3群から合計741個の活動が挙げられ，そのうち活動に対する有能感，価値，興味の認識が2点以下であった活動は荒川区が合計5個，札幌市が合計10個，只見町が合計10個であった．活動に対する有能感，価値，興味の認識を3群間で比較した結果，有能感と興味に有意差が認められた($p<.000$)．合計時間を3群で比較した結果，仕事と認識した活動時間，ADLと認識した活動時間，非常にうまくやったと感じた活動時間(有能感5点)，うまくやったと感じた活動時間(有能感4点)で有意差が認められた($p<.05$)が，その他の合計時間では3群間に有意差は認められなかった．

[考察]　本研究の目的は，地域によって健康高齢者の1日の生活時間に対する認識に相違があるのかを検討することであった．その結果，3群間で有能感と興味に有意差が認められた．また，合計時間では3群間で仕事やADLと認識した活動と高い有能感を感じた活動に有意差が認められた．これは，地域によって健康高齢者の1日の生活時間に対する認識に相違があることを示唆する結果であったと考えられる．一方，有能感，価値，興味が2点以下であった活動は3群とも合計10個以下と非常に少なかった．これは，健康高齢者は低い認識の活動がほとんどなく，それは異なる地域でも共通していることを示唆する結果であったと考えられる．

[結論]　本研究では，異なる3地域で健康高齢者の生活時間に対する認識を調査した．その結果，健康高齢者の生活時間に対する認識には地域差があることが明らかとなった．一方，健康高齢者の生活時間の認識の中でも低い有能感や価値，興味に焦点を当てた場合は，地域差がないことも明らかとなった．